

講義中心型の伝統的授業における主体的学びへの転換

Conversion from Conventional Lectures to Participatory Lessons

本田 直也

大手前大学 CELL 教育研究所

大学教育の質的転換が求められている中で、一方通行型の講義から学習者が能動的に参加するようなアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業へと転換することが求められつつある。スムーズに学びの転換が行われる授業もあれば、カリキュラム構成上、どうしても一方通行型の伝統的な講義も一部必要とされる。本稿では、講義中心型の伝統的授業において、学生の受講態度を刺激し、主体的な学び方へと変容させていくための様々な授業の工夫について報告する。その授業改善の過程で起きていることを報告し、それらの取り組みの課題や、将来に向けての挑戦をまとめる。

キーワード：授業設計、授業改善、アクティブ・ラーニング、主体的学び、学習評価

1. はじめに

近年の社会の変化を受けて、大学教育の質的転換の要求が高まりつつある。大学の授業では、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学習者が能動的に議論したり、答えを探索したり、発表したりするといった、能動的学修（アクティブ・ラーニング）へ転換していくことが求められている（文部科学省 2012）。しかし一方で、グループワークやグループディスカッションなどの形式だけを取り入れて、学習者の頭が能動的になっていない、といったいわゆる「活動あって学びなし」状態に陥る失敗事例や、そもそも授業時間内に協働学習を行う時間を確保することができない、といった学びの転換の困難さなどが、実際の教育の現場で起きている。

本稿では先の例に挙げた、授業設計上、授業時間内に協働学習を行うことが困難な講義中心型の伝統的授業において、受講者が主体的に学ぶ姿勢へと変容していくような授業作りのアイデアと工夫について述べていく。そして、実際の授業実践の中でどのようなことが起きているのか報告する。最後に、抱えている課題や今後の展望について述べる。

2. 対象授業について

本稿で取り上げる講義中心型の授業は、大手前大学現代社会学部にて、主に2年生以上を対象として開講し

ている情報系科目「情報システム管理」である。この授業は国家試験「ITパスポート」に沿った内容を取り扱っており、学習範囲、量、専門用語数などは膨大である。例年、80人規模の学生が受講しており、授業形態は伝統的な一方通行型の講義である。

伝統的授業や一方通行型講義と対比される授業形態として主体的、対話的で深い学びの活動を行うアクティブ・ラーニングと呼ばれる学習手法がある。様々な授業がアクティブ・ラーニングか否か、0、1で分類されるのではなく、実際には知識を習得する講義部分と、その内容を活かして書く、解く、議論する、発表するといった能動的な学習活動との組み合わせで授業が構成される。それらの組み合わせの比重によって、授業は(1)講義型授業、(2)講義中心型授業、(3)講義+アクティブラーニング型授業、(4)アクティブラーニング中心型授業、のように類型化される（溝上 2014）。

本稿で取り上げる講義中心型授業は、議論する、発表するといった活動は無いが、コメントシートを用いたり、指名して回答させたりといった学習者との双方向性を一部組み込んだ、教師主導の講義中心授業である。本科目は資格対策であることから、ある種の詰め込み型学習を構成している。本稿では、授業形態の良し悪しを評価することを避け、あくまで講義中心型授業において導入と実践可能な、有効な授業改善の工夫について述べていく。

3. 授業設計と授業の工夫

3.1. 学習展開のパターン

対象授業は毎回同じパターンで学習が展開される。その展開順と時間配分を図1に示す。

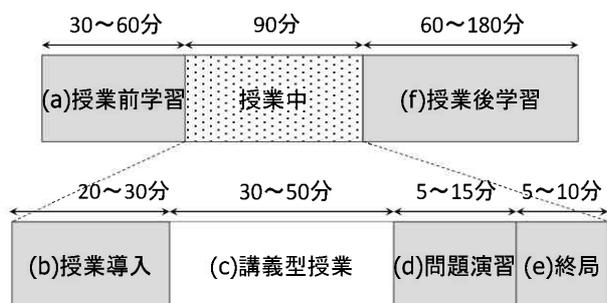


図1 学習展開パターンと時間配分

- (a) 授業前学習・・・(30～60分)
- ・ 配付資料（スライド、ワークシートなど）の入手と印刷
 - ・ 教科書および配付資料にざっと目を通す予習
 - ・ 重要用語の穴埋め小テストの勉強
- (b) 授業導入部・・・(20～30分)
- ・ チャイムと同時に穴埋め小テスト（7～8分）
 - ・ 前回回収分のミニットペーパーから返答と共有を、前回分の復習も兼ねて（7～8分）
 - ・ 課題の解説と振り返り、フィードバックなど（5～15分）
- (c) 講義型授業本体・・・(30～50分)
- ・ スライド、プロジェクタ、配付資料、ワークシートを用いて一方通行型講義の展開
 - ・ 眠気覚ましに穴埋め記述
 - ・ 問いに対する指名と回答
- (d) 修得知識を活用する演習・・・(5～15分)
- ・ 一般的な参考書などに掲載の問題を解く
 - ・ 巡回指導したり、指名回答させたり
- (e) 授業の終局・・・(5～10分)
- ・ 簡単に、手短かにまとめ
 - ・ 授業後に取り組む課題指示
 - ・ ミニットペーパーへの書き込みと提出
- (f) 授業後課題学習・・・(60～180分)
- ・ 課題に取り組む、完成したら提出

3.2. 授業改善の狙い

授業改善を行うといっても、どの点に注目するのか、どのように変化と改善を目指すものなのかは多種多様

である。対象とする授業で筆者が特に意識していることを以下に列挙する。

- (1) 学ぶことを粗末にさせず、学ぶことを大切にしてもらう
- 消極的な学びの態度を取らない
 - ・ 寝ない、携帯を触らない、私語は程々に、渋々受講しない
 - 準備してから授業に参加する
 - ・ 自ら教材を用意して持参
 - ・ 予習してから受講
- (2) きちんと学習を補い、学び散らかししない
- 試験や課題の意味づけ
 - ・ 学習者ができるようになったことを示すもの
 - ・ 学習者にできなかったところに気づいてもらうためのもの
 - ・ ×印やマイナスは、ペナルティではなく、補う箇所を明確にするもの
 - 補う学習、再学習を重視
 - ・ 間違ったところ、できなかったところに再度挑戦
 - ・ 学習者ができるようになるまで、教師は付き合っただけのこと

3.3. 授業の工夫

前節で述べた授業改善の狙いを実現するために、次に記す授業の工夫を行っている。

① 資料の事前配付と持参

すべての資料はLMS（Learning Management System；学習管理システム）上で公開、配布している。学習者には自ら印刷して持参してもらうようにしている。狙いは次のとおりである。

- ・ もらえる（受動的）から用意する（能動的）
- ・ 自分のものを大切に、愛着を持つ
- ・ 入手する、印刷する、という過程で次の授業を受け入れる意識付け
- ・ 印刷ついでに目を通してもらい、僅かでもいいから予習

② 予習の小テストを実施

学習者が授業中に寝たり、気が散漫になり、携帯を触ったり、関係の無い行動を取ったりする原因を追求したところ、「専門の学びが難しいから」、「専門用語になじみがないから」といった声も少なくないことがわかった。専門の学びを受けやすくするには、そしてあらゆる学生の学びの質を高めるにはどうすれば良いか、という問いに対する1つの答えとして、予習を重視する

ことに至った。授業で指定の教科書の、赤で書かれている用語を丸暗記してもらい、その記憶を試すための小テストを授業の冒頭で実施している。小テストで単語を詰め込んだおかげで、授業がわかりやすいとか、馴染みを持ってその分野を学ぶことができる、といった肯定的な声が数多く見られるようになった。

③ 小テストの解き直し

テストは優劣を付けるためのものでなく、学習者にできなかったところに気づいてもらうためのものである。出来たこと、出来なかったことを採点により明らかにして、出来なかったことを補う学習が最も大事である。小テストの結果は速やかに返却し、解き直しという学習に挑んでもらう。勘違い、思い込み、さらなる躓きもあって、1度で満点にならない場合は、繰り返し解き直しを行い、満点になるまで継続させる。解き直しで補った分は、一部成績評価に反映させるなどの授業設計の工夫も必要である。

④ テストの出題内容は十分に予告

学生がテスト勉強しない、できない理由を徹底して潰していく必要がある。学生からすると、何が出題されるかわからないから勉強しづらいという面もある。受験者は、予測や山かけなどするから、運で結果が左右してしまう。勉強したのに、点数が取れない、という言い訳を潰し、学習量に応じた結果が出るような仕組みにする必要がある。

テストの出題内容を明確にする究極的な方法の1つは、テスト用紙そのものを事前に配布し、事前勉強に活用してもらうことである。小テストは成績評価の材料集めではなく、授業を受けやすくするためのものであり、事前予告により受講者皆が高得点を獲得してしまうことは狙い通りである。

中間試験、期末試験のような大きな節目に実施する試験においても、試験の実施をきっかけにしっかりと勉強してもらうことが狙いである。具体的な方法として、前年度の過去問を配布し、同じ問いを数多く出題するとか、数値だけ変えた類題を出題すると予告する。

⑤ テストはすぐに返却

テストは学習者にできなかったところに気づいてもらうためのものであり、採点済み答案用紙は貴重な学習教材である。小テスト、中間試験、期末試験のいずれも翌週授業までには返却する。具体的には、第8回、第14回授業の一部で中間試験、期末試験を実施し、翌週の第9回、第15回授業時には返却と解説を行い、解き直し学習へと速やかに移行していく。

⑥ 中間試験・期末試験も解き直し学習を重視

中間試験や期末試験は、最終成績を算定するための材料集めという面もあるかもしれないが、それよりも、できなかったところを明らかにして、それが解けるようになるための学習が重要である。繰り返し、解き直しの学習を行い、満点になるまで継続させる。第15回の授業後には、自由に参加できる補習を開いたり、個別の面談指導を設定したり、メールなどを用いた遠隔指導を行うなど、柔軟に対応している。

⑦ コースパケットによる資料一括配布

各回の授業資料は、必要な時に、必要なものだけを選んで必要数配る、といった受け渡しが一般的ではあるが、そのような教員都合による自転車操業的な資料準備と配布を止め、コースパケットを作り一括配布することとした。コースパケットには次のようなものが含まれている(池田ほか 2001)

- ・ 学生が予習したり授業中に使用するための教材(論文のコピー、その他の資料など)
- ・ 課題(練習問題、レポートの指示と執筆のための参考資料)
- ・ 必要なときは練習問題のヒントや解答
- ・ 参考文献ガイド

これらを一括で配布することで、教員にとっては教材作成に追われることがなくなり、学生の学習指導に専念できるというメリットがある。学生にとっては、授業開始時に学習全体が俯瞰でき、覚悟が整う。

実際に本授業で2015年度に作成して配布したコースパケットの中身は次の通りである。

- ・ 各授業回のスライド資料(合計304枚)
- ・ レポート課題指示書(全10題)
- ・ 予習指示書と小テスト問題予告(全11回)
- ・ 中間試験過去問(前年度分1回分)
- ・ 期末試験過去問(前年度分1回分)
- ・ 学習評価・成績評価のためのルーブリック(1シート)

⑧ 成績評価の観点や水準の明確化

学生の学習に力が入っていなかったり、力の注ぎ方のバランスがおかしかったり、ここぞという時にあと一歩頑張れなかったりする様子が見られることは少なくない。原因は様々存在するが、教師と学習者との間で成績評価の観点や水準が十分共有されておらず、学生から見ると何をどの程度完了させればよいのかわからない、という面もある。観点と水準を明確にすることで、学習しやすさを向上させることと、学習できな

い理由を潰す狙いがある。具体的には、成績評価のためのルーブリックを作成して配布する。

⑨ 成績評価材料の足し合わせを行わない

例えば、テスト40%、課題30%、発言・意欲30%といった足し合わせと輪切りによる成績判定を行わない。すべての学習を大事にしており、足りないものを他の材料で補うという考えが適切ではない。テストの解き直しの例のように、学習が完全になることを目指している。材料ごとの完全性を目指しているため、程々のものを足し合わせるという評価法はそぐわない。具体的にはルーブリックを用いて成績評価を行う。

⑩ 出席に点数を与えない、欠席に減点しない

学ぶ意思を持って、主体的に学習に参加することを大切にしており、学生にもそれを伝え、徹底している。出席点がもらえるから渋々授業に顔を出すことが起きないようにしている。なお、授業に主体的に参加し、小テストや発言により点数を獲得することを可能としているが、それは出席点ではない。欠席すると、それらの点数を獲得できないため、減点評価せずとも自動的に評価が落ちていくものである。

⑪ 学ばず出席することは欠席とみなす

先述の通り、顔を出すだけでは何も加点されず、成果を示して始めて加点される。予習も、事前準備も、十分な体力も気力も無しに授業に顔を出したならば、何も点数を獲得することができず、欠席と全く同じ評価となる。寝るくらいなら、携帯を触るくらいなら、授業を休んだ方がよっぽど有意義だろうと論じつつ、出席するからには受動的ではなく、主体的に参加するよう促している。

⑫ 学習者の声をよく聴き、拾い、対応する

ここまで述べてきた様々な授業の工夫は、年々改良を重ね、たどり着いたものである。仮説を立てて、それに対処して検証することを繰り返している。例えば、学びにくさや学習の躓きを特定し、それに対処していくときに、学習者の声を上手く生かす。具体的には、ミニットペーパー（コメントシート）から情報を集めたり、思いついたら急遽アンケートを実施し集計したりしながら、学習者と共に解決を目指す。

4. 工夫の成果と今後の課題

様々な工夫により主体的な学びの姿勢へと変容し、授業中に寝る、携帯を触るといった行動はほとんど見られなくなった。授業の直前の休憩時間には、早めに教室に到着した学生から黙々と予習と小テスト対策の

勉強を行うようになってきた。テストを受ける意味も解き直し学習に関しても、ミニットペーパーなどからその真意が伝わっていることがわかる。しかし全員がそのように変容しているとは限らず、強く響き共感する者と、それなりに反応する者と、何の手を打っても効果が無い者に分かれてしまっている点は課題である。

これらの取り組みは、教師にとって負担が大きいという点も解決困難な課題である。準備の時間、仕組み作りの時間、繰り返し解き直しに対応する時間、そして第15回授業後も成績入力締め切りまで学習活動が続くことなどが負担となっている。負担軽減しつつも成果を挙げる方法を模索していかなければならない。

常に手応えを感じつつ、継続的な工夫によってより良い授業へと改善しつつあるが、それを客観的に示す方法が無い。授業を工夫し改善することと、学生たちの専門修得に注力しすぎてしまい、振り返ることが手薄になっていることは否めない。学生たちが一体何の力を付けて、どのように成長したのか、学習成果の可視化をすることが課題であり、本取り組みの成果を明らかにすることも今後の課題である。

参考文献

- 文部科学省 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) . 文部科学省 中央教育審議会
溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 東京.
池田輝政, 戸田山和久, 近田政博, 中井俊樹 (2001) 『成長するティップス先生』玉川大学出版部, 東京.

SUMMARY

The purpose of this paper is to propose the method of class improvement in which students study proactively. Each class at the university is required to be converted from traditional lecture to proactive learning by adopting active learning, but some classes remain in traditional lectures. In this paper, small practical methods for improving lesson on traditional lessons are reported. Finally, future issues are mentioned in the conclusion.

KEYWORDS: CLASS PLANNING, CLASS IMPROVEMENT, ACTIVE LEARNING, PROACTIVE LEARNING, LEARNING ASSESSMENT